

小説：5年後のベビーユニバース

五十嵐 隆典 著



BABY UNIVERSE

© Copyright BABY UNIVERSE All Rights Reserved.



はじめに

株式会社ベビーユニバースの代表取締役を拝命しております五十嵐です。

2007年11月30日現在、弊社は総勢9名の小さな小さなソフトウェア開発会社です。

壮大で漠然とした目標はあるのですが、私の中でどうもおぼろげだったので、小説というフィクションの中で、5年後の目標到達地点を出来るだけ詳細にイメージしてみました。

勿論、未来は誰にも分からない訳ですが、今はこの目標に向かって一歩ずつ歩んでいきたいと本気で思っております。

お陰さまで、やはりこの小説を書き終えてイメージが大分固まりました。

また、このイメージはスタッフとも共有したいと思っております。

本来なら私とスタッフだけが共有すれば良い訳ですが、こうして皆様にも公表させて頂きました事で、良い意味で自分達へのプレッシャーとなれば幸いと考えました。実際の成功者がドキュメンタリーとして書く事が本来のビジネス書の姿である事は重々承知しておりますが、このような四方山話でも暇つぶしに読んで頂ければ最高の幸せでございます。

それでは、『小説：5年後のベビーユニバース』はじまり、はじまり....



目次

表紙.....	1
はじめに.....	2
目次.....	3
ガレージ.....	4
預ける.....	5
バランス.....	6
メンタルケア.....	7
温泉と地ビール.....	8
気になる揺れ.....	9
エコとオタク.....	10
魔法の香り.....	11
アドバイス.....	12
接客.....	13
ファーム・ウェア.....	15
澄み切った風景.....	16
重厚な気品.....	17
冷たい水と暖かい涙.....	18
漁師が量子.....	19
過去の幻想.....	20
温まる温泉.....	21
凄いコピー.....	22
解禁.....	23
湯豆腐.....	25
座禅.....	26
茶室の出来事.....	27
母の愛.....	28
血の入れ替え.....	29
あとがき.....	30



ガレージ

重みのある朝霧がようやく晴れ、透明で澄んだ空気に包まれた緑、それらに覆い尽くされた近代的な建物の一面、贅沢にも個室に区切られた開発ルームにて、

「ね、ね、倉重さん！、倉重先輩！」

くたくたのチャンピオンのトレーナーに、これまた年モノのXX(ダブルX)のリーバイスを腰で履いた新卒の三田が、倉重の個室のドアを遠慮なく叩いた。

三田より1つ年上でちょうど1年先輩の倉重は徹夜明けの重いまぶたをこすりながら、

「なんだよ、またおまえか！、俺は今、結構のってるんだっつーの、今日中にこの部分を二人で仕上げておかないと、おまえ〜、また山中チーフにどやされるぞ！」

それでも三田は懲りずに、

「だって、倉重先輩、山中さんが去年作ったらしいこのロジック、スッゲーヤバくて、俺、よく分からないんですよ。あの人がちょっとヤバくないですか？」

あきれ顔の倉重は、

「ばっかも〜ん！、あの人のJAVAは特別なんだよ、あの社長にだってずけずけと言えるのは山中さんぐらいじゃねーか、絶対社長より態度デケーし、今日も朝からずっと部屋にいな〜し。」

「どこ行っちゃったんですか、山中さん？」

「俺、回避策を教えてもらわないとほんとヤバいっす！」

全てお見通しという自信にみちた顔で倉重は、

「おめー！山中さんがいない時は、ぜってーい！あそこだよ、あ・そ・こ！、ガレージに決まってんじゃない！」



地上へとつづく吹き抜けが四方を取り囲んだ状態の強力な空調の効いたガレージ、地下になっているせいか、中の爆音は心地よい振動となって地上に逃げて行く。恐らく普通に車庫入れすれば、車五台は入るであろう広い空間。

通常の車庫は別にある訳だから、ここはレース車の為だけに使われる特別なガレージなのだ。

FIのピット顔負けの整備された工具類。

その工具箱に無造作に六角レンチを投げ込んでいるのが、通称：山中チーフだ。

いまだ30歳の大台には届いていないようだが、すでにベビーユニバース開発部門43名の精鋭を一手に掌握している。

肩書は、チーフ・テクノロジー・オフィサー (CTO)だ。

来週茂木で行われる、スーパーGT3000に出場する山中が駆るマシンのセッティングがどうしても決まらず、総勢5名いるベビーユニバース・レーシングスタッフといっしょに徹夜のセッティングが続けられている。

スタッフに的確な指示を出す彼の真剣な顔は、得意のJAVAプログラムを書いている時よりもはるかに真剣に見えるのは気のせいであろうか...



預ける



伊豆特有の温暖な潮風の中、佐々木（旧姓／伊藤）友美は自転車のペダルをリズムカルにこいでいる。自宅から5分程度の勤め先までの道は、木陰がつづく平坦な自転車専用道路、この道路は敷地にある社宅ゾーンから社屋ゾーンまでを自前で会社が敷設したのだ。自転車の荷台には、軽いヘルメットをかぶった愛娘の美優子が楽しそうに股がっている。出勤という重さは微塵も感じられず、何か2人だけのピクニックに行くような軽やかさだ。

愛娘の美優子が嬉しそうに、

「お母さん、今日のお昼、何食べる？」

友美も目を細めながら、

「今日はお弁当ズルしちゃったから、会社の食堂でパスタ食べようよ、石釜ピザも結構おいしいよ。あそこは美優子がかゆくならないから大丈夫！」

そうなのだ、ベビーユニバース社の食堂は、味やサービスもさることながら、低アレルギーの食材も色々と揃えてるようで安心して食べられると友美は思った。

社屋ゾーンと渡り廊下で繋がっている託児所に行くと、色々な国籍の赤ちゃんから幼児がこれもまた色々な国籍の保母にまわりついている光景が広がっている。

「美優子ちゃん、おはよう！」

夫が開発部SEのフランス人保母セリーナが流暢な日本語で声をかけた。

「はい！セリーナ、ボンジュール！」

美優子はうれしそうに、セリーナのふところに飛び込んでいく。

それを安心したように見届けた友美は、隣接する総務部専用の社屋に向かった。

友美は入社5年目だが、すでに五人の部下をもつマネージャー職だ。

「佐々木マネージャーおはようございます！」

すでに掃除を済ませて、絶品のカプチーノを飲んでいた熊野浩司が元気に挨拶をする。

「熊ちゃん！おはよ。昨日の宿題ちゃんとできてる？」

熊野に挨拶をした友美の顔は、すでにお母さんの顔からマネージャーの顔に変わっていたが、けっして気負いは無い。

熊野から、

「完璧です！」

いつものブラッドオレンジジュースを受取った友美は、

「幸せかも！」

と誰にも聞こえないようにささやいた...



バランス

「このジャケットには、そのオブジェは絶対にあいません！」

荒げた声を張り上げているのでは、当年29歳の寺田功一だ。

この歳で既に、14人のクリエイター集団を統率している。

ベビーユニバースが戦略的に最も力を入れている部門が彼が率いるデザイン部門だ。

いかに社長といえど、デザイン関連の事には口出しはできない。

唯一彼に対抗できるのが、問題のオブジェを提案している男、浜崎だ。

一匹狼という立場ではあるが、ベビーユニバースのアートディレクターとして、絶対の地位を確立している。いわば経営室直属のクリエイターとして当年34歳のアーティストは妥協を許さない。

寺田達のデザイン部門も贅沢な空間を占領しているが、浜崎も贅沢なアトリエを与えられている。

余談ではあるが、ベビーユニバースのボードメンバーは次の通りだ。

CEO (チーフ・エグゼクティブ・オフィサー)

COO (チーフ・オペレーティング・オフィサー)

CFO (チーフ・ファイナンシャル・オフィサー)

CTO (チーフ・テクノロジー・オフィサー)

CCO (チーフ・クリエイティブ・オフィサー)

ベビーユニバースはこの5名で構成するボード会議によって運営されている。

またソフトウェア専門の研究所を自前で持ち、その所長として研究部門を統率しているのが、執行役員の牛島だ。牛島はベビーユニバース・テクノロジーをずっと生み出し続けているのだ。通常：ラボと皆が呼んでいる12名の研究員を収容している建物がそれだ。

牛島はベビーユニバース創立以来テクノロジー部門一筋のいわば天才タイプの現役プログラマーでソフトウェアに関しては誰も逆らえない、CTOの山中也一目おく、いわば重鎮といったところか。

このうち、未だCCO (チーフ・クリエイティブ・オフィサー) の席だけが空いている。

ボードメンバーも、デザインの寺田か、アートの浜崎かを決めかねているのだ。

だがいずれ時が解決するはずだ。

ただし、ベビーユニバースではどのような立場であろうと一般的にいう上下関係は全くもってない。

誰でも社長に意見が出来る社風で、給与も社長が一番とは限らないのだ。

さきほどまで張りつめていたクリエイティブ棟の空気も、最新の空調設備の為か、多少和んでいるように思えた。

「さきほどは、失礼な事を言ってすいません、言い過ぎました、ただ、その大きさだとどうしてもバランスが...やはりもう少し小さくしてレイアウトしますが、いいですか？」

寺田も妥協はしたくないのだ。

さきほどまで心配そうになりゆきを見守っていた寺田の部下達も、いつのまにか、最新鋭のMACモニターに向かってマウスを筆のように動かしていた。部下の友部は少しニヤつきながら思った、

「これがベビーユニバースの絶妙のバランスってやつか！」

「了解！寺田チーフ」

浜崎にも人懐っこい笑顔が戻っている。

「じゃー、もうちょっとこのジャケットにあうように修正するから、来週まで待って！」

「了解！浜崎ディレクター」

「あっ、寺田チーフ、それじゃー今日は僕の行きつけの六本木のクラブに招待するよ、僕はVIPでは入れるんだぜ！」

「ラジャ！今日は全て忘れて、熱海駅に直行！」

2人はベビーユニバースの社用車である電気自動車である最終のこだまが待つ熱海駅に向かっていった...





メンタルケア

深い、深い、原生林が果てしなく続く、まるで地球の全てが森のような錯覚におちいる、ここは晩秋の白神山地、赤々と燃えているのは紅葉と夕日のせいだが、気温は刺すように寒い。

防水透湿性素材のノースフェイス社製ダウンジャケットとメレル社製ゴアテックスブーツがなかったら1日と持つまい。

「あ〜、もうこんな時間か、今日の寝床はここだな。」

熊に遭遇してもおかしくはないこの森にたった1人、男は参ったな！という顔を浮かべてはいるが、その横顔はどこか嬉しそうにもみえる。

どうやら、ひとり徒歩で白神山地を抜けようとしているようだ。

184cmの長身だが、この森では小さくみえる。

男は自然の大きさを目の当たりにして、

「お〜、俺は間違いなく生きてるぞー！」

と吠えた。

この森に入って5日間の疲れはすでに限界まで来ているというのになんという充足感！

彼の背中に寂しさは微塵もなく、長身の男は黙々とゴアテックス製のテントを張っていく。

彼の名は高嶋義之、当年31歳、未だ独身！

株式会社ベビーユニバース、販売部門統括マネージャー、それが彼の肩書きだ。

彼の下には、16名の精鋭部隊がいる。

半年前倒して今期の目標をクリアした報酬として、会社からそれなりのインセンティブ（報奨金）と二週間の休暇をもらったのが、8日前の事だ。

決めていた訳ではないが、準備に3日間を費やし、その後迷わずここに来た。

今回のトレッキング用の費用だけを残し、インセンティブでもらった残りは全て部下達の飲み代に消えた。

繊細でどこまでも優しい彼には社内に敵はいない。

豪腕というにはほど遠いが、粘り強い忍耐力と優しさで販売部隊の猛者（もさ）を掌握しているのだから、恐らくそのストレスは並大抵ではないのであろう。

今回の臨時休暇は目標を前倒して達成したご褒美ではあるが、彼の精神面を気遣った会社の配慮ともとれる。

ベビーユニバースという会社は、そういう会社なのだ。

たき火で焼いた厚めのハムを無造作にパンにはさみ、高嶋は思った。

会社が俺を気遣っているのか？、それとも限りなく人使いが旨いのか？

「まっどっちでもいっか！」

今はまた気力がみなぎってきたのだから...





温泉と地ビール

漆黒の闇があたりを覆い尽くす、ここは箱根の芦之湯温泉。

本来箱根の温泉は無色透明なのだが、同じ箱根でも芦之湯温泉はミルクのように白濁している美肌の湯だ。

通称：宇子の湯は男湯と女湯ともに2つずつの湯船があるが、今は男湯に1人いるだけだ。どの湯船も厳選掛け流しの本格的な温泉となっていて、こまめな掃除をかかさないので、実に清潔な状態を保っている。

微動だにせず浸かっている男はそれなりの歳のようなのだが、正確な年齢はわからない。

彼はベビーユニバース開発部アプリケーション部門長の小菅だ。

恐らく50歳に近いであろう年齢は、無口な職人気質と相まって、いぶし銀のオーラを放っている。

宇子の湯は、以前は老舗の高級温泉旅館だったのだが、今はベビーユニバースの保養施設として蘇っていて、部屋が空いていればいつでも誰でも泊まる事ができる。

熱海の漁港から毎日上がった魚料理から、家庭的なフランス料理まで、一流のシェフが腕を振るう食事が大人気だ。

熱海の開発本部から車で20分なので、若い開発部員はここから開発本部に通っている者もいる。

連日徹夜の激務の末、無事納品を終えた小菅のチームはクライアントから高い評価を得た。

「次に大型システムの刷新を予定しているが、是非ともあなたのチームにお願いしたい」

とクライアントの社長直々に小菅のチームが名指しで指名されたのだ。

疲れてはいたが、当然悪い気分ではなかった。

宇子の湯の名物は、温泉と料理の他に、実は地ビールが有名なのだ。

年間生産量が限られているので、社員限定の人気地ビールとなっている。

この地ビール、実は小菅が作ったものだ。

ビールを作らせたら、日本一のプログラマーだ。

小菅はプログラマーとして優秀な事は当然であるが、

探究心が旺盛で、ビールづくりが趣味であった。

俗にいう玄人はだしとはこのビールを飲めばわかる。

三年前に功績が認められ、このビール工房と専属三名のスタッフが小菅に贈られたのだ。

激務の中で、地ビール工房長の肩書きは面倒だと思うかも知れないが、

「ベビーユニバースの地ビール飲んだら、他のビールは飲めないよな！」

という社員の声を聞くと、ストレスも吹っ飛ぶというモノだ。

そんな宇子の湯の静寂は長くは続かなかった。

先月、ベビーユニバースUSAから来た、伝説の開発コンビ、ジャックとウェルチは、まだまだ日本の温泉マナーには慣れていない。

大声で喋りながら、泡のついた体とタオルを水面下に浸けて、湯船に駆け込んで来た。

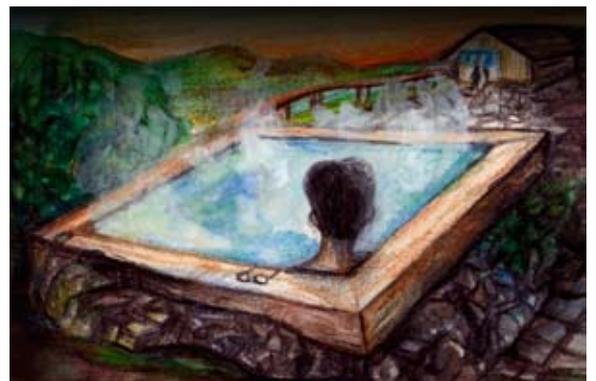
彼らには熱いのか、せっかくの天然温泉を水でジャブジャブ薄めだした。

顔をゆがめた小菅は思うのだ。

「グローバルは大変結構だが、日本古来のマナーも大切にすべきだ」

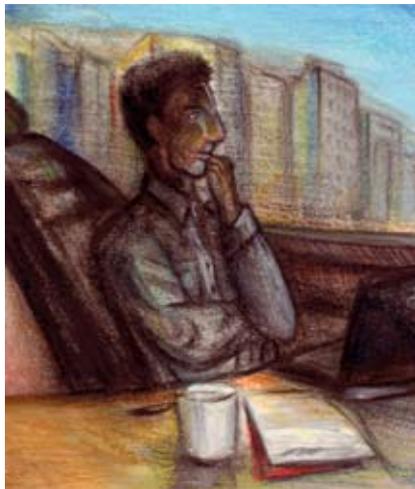
と、彼らには聞こえない程度にささやく。

それからやや早足で、地ビール工房へ長い長い味見へと向かっていった...





気になる揺れ



気になる揺れは全く感じないが、一路東京に向かっている列車の時速はすでに500キロを超えているようだ。

東京―大阪間を約1時間という速さで結ぶリニアモーターカーが開通したのだ。

その特別個室で優雅な顔とは裏腹に、指の動きが見えないほどの速さでキーボードを叩いているのは、ベビーユニバースの代表取締役社長およびCOO(チーフ・オペレーティング・オフィサー)の小山だ。

大阪の最重要クライアントとの締結を無事終え、昨年構えた東京の本社へ帰るところなのだ。

会長がCEO(チーフ・エグゼクティブ・オフィサー)の地位についてはいるが、マーケティング、セールス、経理、総務、人事など開発部門以外は、小山がほぼ全権を手中に治めている。

ベビーユニバースをここまで築き上げたのは現会長だが、ベビーユニバースの成長をさらに加速させる為、困難だったヘッドハンティングを会長自ら精力的に続け、当時、著名なコンサルティングだった小山を2年前にようやく落としたのだ。

偶然にも会長と小山は同じ歳だが、タイプはまるで違う。

でもその選択が間違いで無かった事は、直近2年の売上推移だけを見ても疑う余地がない。

「自分よりも有能な者がいるのであれば 速やかに権限委譲する」

これがベビーユニバースの社風なのだ。

誰であろうと、今日の地位はあまり意味をもたない。

その小山の横で書類を確認しているのが、秘書の高畑だ。

前の会社でも小山の右腕だったが、小山と一緒にベビーユニバースに移って来たのだ。

小山をして、

「高畑がいなければベビーユニバースではやれない！」

と言わしめた有能な男だ。

モデル並みに長身の高畑は、若く見えてもすでに40代半ばを折り返している。

小山がキーボードを叩く手を止めた、

「緊急に最高経営会議を明後日開く、すまんが、俺の全てのスケジュールを調整してくれ、5人のボードメンバーは勿論だが、牛島所長とベビーユニバースUSAのジェフ、それにEUのマリアも呼んで欲しい」

高畑は最高機密である重要メンバーのスケジュールを瞬時に検索し、

「マリア氏はインド出張中です。また牛島氏は新技術の提携の為、CTOの山中氏とベルギーのクライアントのところにおります」

と簡潔に答えた。

小山がさりげなく返す、

「そうか。では彼らはテレビ会議でいい、すぐに準備をしてくれ」

「はい」

いつものように答える高畑だが、頬が硬直している。

「きっと何かが起る、ベビーユニバースを揺るがす何かがある…」



エコとオタク

鉛色の潮風をもろともしない機能性を備えたイギリス海軍のダッフルコートをフード部分まですっぽりと羽織っているのは、ベビーユニバース開発部画像処理チームのリーダー、福岡だ。

今でもオタクの聖地、秋葉原通いを欠かさずに行っているらしく、彼が精通しているジャンルである各国の軍服と戦争系アニメキャラクターでは、秋葉原でも伝説となっているプログラマーだ。

その彼のもう一つの顔が、ベビーユニバースのエコロジー戦略室チーフとしての肩書きだ。

ベビーユニバースの国内最大の開発拠点である通称：熱海基地の水と電気は全て自前で補っており、水とゴミは完全に熱海基地内で循環されている。

そのシステムの開発から管理までは、すべて福岡の手にかかっているのだ。



一方、ベビーユニバースの最も重要な事業の柱がサーバー関連事業だから、一時たりとも電気を止めるわけには行かないのだ。

その為、二重三重の電気のバックアップシステムを敷いてはいるが、サーバー関連事業の成長性が著しい現在、予想より早く電気が足りなくなるといふ計算結果がはじかれたのだ。

その対応には社運が掛かっているといっても過言ではない。

だから福岡は、断崖となっている強烈な海風が拭くこの熱海基地の敷地のはずれまで来て、その風力を測定していたのだ。

どうやら風力発電を考えているのでだろう。

エコロジー戦略室での彼の右腕である鹿島に向かって的確な指示を出していた。

「各ポイントで風力による力が最大になる地点をつかめ、かつ、年間平均で風力量が最も最大になるようパラメーターを調整して算出するんだ」

福岡の作った風量計算ロジックを覗いていた鹿島が言った、

「はい、了解です、福岡チーフ、でも案外この風量なら行けそうですね。二ヶ月の統計から、年間の目標ワットを稼げると結果が出ています」

ずっと地道な調査を続けていた福岡は愛嬌のある笑顔で、

「そうか、それじゃー、経営会議で予算を確保してもらう為の設備試算もしてきてくれ。地球環境も大事だが、会社のコストは出来るだけ抑えねばならないからな、業者への交渉も頼む」

「了解！すぐに取りかかります」

きびきびと鹿島は答えながら思った、

地球環境とベビーユニバースの環境どちらも福岡チーフの肩にかかっているのだ、

「ついに福岡チーフは、エコロジーオタクという新ジャンルでも伝説となったか」

そんな鹿島の思いを裏切るように、切実な顔で福岡は言った。

「寒む！、アキバのおでん缶で暖ったまりてー！」



魔法の香り

あたり一面に漂う幸せの香りが、潮風のスパイスでさらに際立っている。

糸のように細くなった湯が、マジシャンのようにくねらせている特性のネルドリップに染みていく。

湯は富士山麓のわき水をわかしたモノだ。

ベビーユニバース開発部の本拠地である通称：熱海基地の社食に隣接するオープンカフェでは、気が向くと会長が自慢のコーヒーを社員にふるまっているのだ。

シルバーグレーの髪とインディゴのエプロンに隠れたふくよかなお腹が、まるで本物のマスターのようだ。

実際、会長とは知らずに、おかわりまで頼む新入社員もいるほどだ。

Bang & Olufusenのステレオに刺さった会長自ら選曲した iPodからは、控えめなボリュームのしなやかなJAZZが心地よく流れている。

幸せな香りと幸せな時間を決して邪魔したりはしていない。



そんな時間がゆっくりと過ぎて行く中、広いカフェでは一部分殺気立った一角があった。

ベビーユニバースEUから来ているSEのビリーと山中CTOの秘蔵っ子の小松が英語で何やら論戦を繰り広げている。

「パリの方が、人員のローテーションがスムーズに廻るし、優秀な人材が揃っている」

とビリーが言えば、一歩も引いてなるものかと小松が反論する。

「それは違うな、ビリー、熱海基地には優秀なプログラマーがいる事は勿論だが、牛島ラボが近くにあり、瞬時にその技術を取り込める体勢があるから、絶対に今回のシステムは熱海基地の方が有利だ」

どうやら、次期開発予定の自動画像処理システムの開発拠点をパリにするか、熱海基地にするかで揉めているようだった。

最初は"触らぬ神に"の姿勢で見守っていた会長だったのだが、おもむろに入れたてのコーヒーと地元の牧場直送のミルクを50対50で割った大盛りの特性カフェラテを2つ持って、目を細めながら小さな戦場に向かってくる。

その特性カフェラテを何も言わずにビリーと小松に差し出すと、エプロンを脱いで、さっさと東京本社に戻って行ってしまった。

会長によって変に間が空いた2人は、お互いの手元のカフェラテを一口ずつ飲んで思わず笑ってしまった。

「旨い！」

「うん、これが噂のカフェラテか」

ビリーは気を取り直して、論戦を再開しようと思ったのだが、すでにその勢いは薄れ、

さらに照れながら言った

「わかったよ、小松君、それならパリで設計するから、コーディングは熱海基地でやってくれ」

「了解ビリー！、早速山中CTOに許可をとってこちらのコーディング・ローテーションを組むよ」

大きなカップにあった大盛りのカフェラテはすでにもうないが、同時に争いもなくなっていた。

あたりには魔法の香りがほんのりと漂っていた...



アドバイス

今やグローバル企業となったベビーユニバースには、各国の支社は勿論の事、国内の社員の中にも色々な宗教の信者がいる。宗派まで分けていたら、指が幾つあってもたりないぐらいだ。

従って、クリスマスなどという偏った宗教のイベントはある意味タブーなのだ。

だが、そんなベビーユニバースでも大晦日、つまり12月31日には毎年盛大なイベントが開かれている。

各支部持ち回りの幹事が趣向をこらした年越しイベントを企画するのが恒例となっている。

そのかわり、そのイベントが済むと15日間の長い冬休みがたっぷりとあるのだ。

2012年の今年は5年ぶりに東京本社の若手営業のエース：営業本部対アパレル戦略課のチーフ職の三沢晴彦が幹事長に抜擢されている。

三沢はこのイベントを成功させるというミッションを、いわば日の丸を背負って遂行せねばならないのだ。勿論、その間の通常業務を免除されるというような甘い会社ではない。

ただし、そのイベントにかかる費用は民間会社のイベントでは破格の予算が認められる。

つまり大晦日の最後の日に社員の心が一つになり、楽しく盛り上がり翌年のモチベーションを高めるという目的がある為、その費用対効果は絶大なのだ。

青森県弘前にあるアパレル専門学校への納入を終えた三沢は、空路をとんぼ返りで東京本社にもどり、会長の待つリラックスルームに入っていた。

会長はいつになく真剣なまなざしで、台の上にある九つの球を見つめており、その右手にはアダムス社製の特性のマイ・キューが握られている。

そうなのだ、会長はイベント幹事長を背負った三沢を気遣い、リラックスルームでのビリヤードに誘ったのだ。

会長は次々と球を四隅のポケットに沈めて行き、三沢を気遣っているというより、真剣にゲームを楽しんでいるようだ。

恐らく何かアドバイスをくれると信じて待っていた三沢は、いつまでも自分のペースで黙々と球をついている真剣な会長に対して、ついには大学時代にビリヤード同好会でならした三沢の負けん気が火がついた。

「会長といえども手加減はしませんよ」

「望むところだ、三沢！、そう易々と若いもんには負けんからな」

結局、仕事もイベントの事も全て忘れ、三沢は打倒会長の真剣モード状態となり、時間も忘れて負けじと球を沈めて行った。

最初は負けていた三沢だったが、後半は学生時代の感をとりのどし、きん差で逆転勝ちを収めた。

「三沢！、今日は華を持たせたが、次回は負けなぞ」

最後まで真剣だっ会長は、よほど悔しいのか、J.PRESSブランドの紺ブレザーを羽織ってそそくさとリラックスルームを出て行ってしまった。

取り残された三沢は、Saeco社製エスプレッソマシンのカップチーノボタンを押していた時、ハッと思った。

「そうか、真剣に競い合うってこんなに面白くて、全てを忘れる事ができるんだよな、会長はひょっとしてその事を...」

会長の真意はさだかではないが、翌週の三沢の机には、企画書がのっていた、

「各国支部対抗ワンメイク・ロボット選手権」

通常のロボットコンテストではなく、ロボットは全く同じ仕様を提供し、制御系ソフトウェアでの完成度を競う。競技は、陸上競技の徒競走とハードルと高飛びと幅跳びの総合点を競う！

優勝の支部には、1000万円の賞金と支部全員の10日間の休暇旅行。

「これは盛り上がるぞ...」





接客

帰宅でごった返す東京駅の喧騒も地上28Fにあるベビーユニバース本社までは上がってこない。通常であれば、この営業本部受託開発部の精鋭達も帰途についているはずだが、今日はかなりがまだ残っていた。

なぜか、広い営業本部の空気が重苦しい。

「ご迷惑をお掛けして大変申し訳ございません！こちらの説明不足でした」

と深く下げた頭が目の前のコーヒーをこぼしそうになってるのは、受託開発部14名の中でも常にトップクラスの成績をキープしている木下だ。

隣には、木下の直属の上司である遠藤マネージャーが、木下と合わせるように頭を下げていた。

相対して、革張りのソファに深々と重そうな腰を鎮めているのが、クライアントであろうか。

高級そうなウールの背広を身にまとっている初老の紳士だ。

一見温和な感じに見えるが、目つきは鋭い。

隣には黒いスーツで固めた屈強な長身の男が二人、軍隊式の休めの状態で立っている。

それだけでも額に脂汗をかいた木下には凄いプレッシャーだろうと想像できる。

ずっと木下の説明を聞いていた、初老の紳士が漸く重い口を開いた。

何かもったいつけているようでもある。

「木下さんと言ったね？」

間髪入れず、

「は、はい！」

と木下。

「私たちは、全面的にあなたを信用したから、機密情報を包み隠さずお話しして、その上で、我々が今度立ち上げる新規ビジネスのシステムを御社に依頼したのですよ」

ゆっくりと、かつ重圧的に紳士が続ける。

「それをこの後におよんで、契約書に判子を押そうという時にご辞退なさるとはどういう事なのか？」

温和にみえる表情をかえる事なく、声色だけがさらに重くなって続ける。

「確か、公序良俗に反しない限り基本的にどんな開発も引受ける、というのが、御社の創業以来の理念でしたよね？」

すでに木下では無理だと判断した遠藤マネージャーが、初老の紳士の鋭い目元から視線を外さずさわやかに答えた。

「はい、確かにお役に立てるなら基本的にはどんな開発でも引受けるというのは、弊社の企業理念でございます」

今度は語気を強めて、遠藤マネージャーを睨みながら、

「じゃーなんですか、今回のドタキャンは、弊社が公序良俗に反するとでも？」

こんな状況でも清々しく、遠藤は答えた。

「いいえ、とんでもございません」

「今回のクーポンのシステム自体は何ら問題ないと思われませんが、それらをお使い頂く企業様の目的が、オンラインでのスロットゲームやカードゲームでご利用される可能性があり、場合によっては法にふれる可能性も否定できないと判断させて頂いたのです」

「その事をもう少し早い段階で予見できなかった事は弊社の失態であり、今さらながら反省しております」

「誠に申し訳ございません」





自分の息子よりも若いと思われる遠藤マネージャーのどこまでも澄んだ目を見つめていた初老の紳士の顔が少しほころんだように見えた。

「わかったよ、遠藤君のいう通りかもしれない、運用を深く考えなかった弊社にも非はある」

そう言った初老の紳士は、おもむろに立ち上がって、屈強な長身の部下達に向かってあごを突き出して言い放った、

「帰るぞ！」

「ご理解頂きありがとうございます、今後はこのような事が無いよう部下にも徹底させます、申し訳ございませんでした」

90度に体をおりながら、遠藤マネージャーはエレベーター前で、再び頭を下げている。

コピーしたように頭をさげている木下の足は、ほんの少し震えているように見える。

「遠藤君、今日は黙って帰る事にするが、1度、うちに遊びに来てくれんか、それから、お宅の会長にもたまには顔をみせるように言っておいてくれ」

体勢はかえず、頭だけ持ち上げた遠藤が笑顔で答えた。

「はい、喜んで伺います、また会長にも必ず伝えます」

エレベーターのドアがしまった後もしばらく二人は同じ姿勢でいた。

横目で遠藤をチラ見した若手のエース木下は思った、

「ふう～、ベビーユニバースの営業ってどこまで凄いんだ...」



ファーム・ウェア

目に痛いぐらいの新緑に包まれた森、いや、ここはソフトウェア開発会社としては中堅のベビーユニバースの主要開発拠点である通称：熱海基地だ。

森に見えたのは、そのぐらい様々な木が茂っている事、建物の回りには奇麗に整備された芝生が生い茂っている事、さらには、自然にとけ込むように設計された建物にアイビーの蔦が絡んでいる事が理由として上げられる。

無理をすれば熱海駅から歩けるであろう相模湾一望の岡の上の広大な敷地に、ベビーユニバースの開発拠点は位置している。

開発棟が2つ、デザイン棟と通称ラボと言われる研究所、その他にマーケティングや総務などが入っている通称：本部棟、隣接して社食や託児所がある通称：母棟、最後にレクレーションや天然温泉施設やスポーツジムが入っている通称：娯楽棟、それとベビーユニバースのボード会議が開かれる通常：司令棟がある。

その熱海基地とをやはり新緑の道路で結んだところにあるのが、通常：ベースキャンプという愛称で呼ばれている社宅ゾーンだ。社宅ゾーンには独身寮と既婚者が住む一戸建ての社宅があるが、やはりどちらも平屋になって緑にとけ込んでいるのだ。

ベビーユニバースの重役達も全てが同じ仕様の社宅に済んでいて、一般社員との差はない。

熱海基地と社宅ゾーンの距離は徒歩5分程度であるが、その間もベビーユニバースの私有地となっており、木々に挟まれた私設道路の両側には、英国タイプのハーブ園と有機栽培の畑がある。

ハーブ園では、カモマイルやミントなどを始め様々なハーブがプロの職人によって美しく栽培されており、社食の素材として、またはハーブティ、さらには、温泉の中にあるハーブ風呂にもふんだんに使われている。

それらは、直接、社員の健康維持に繋がっていると共に、リラクゼーションなどの効果がソフトウェア開発の発想に間接的にのおおいに役立っているのだ。

勿論、社食では畑の採れたての有機野菜が、毎日の献立に使われているのは言うまでもない。

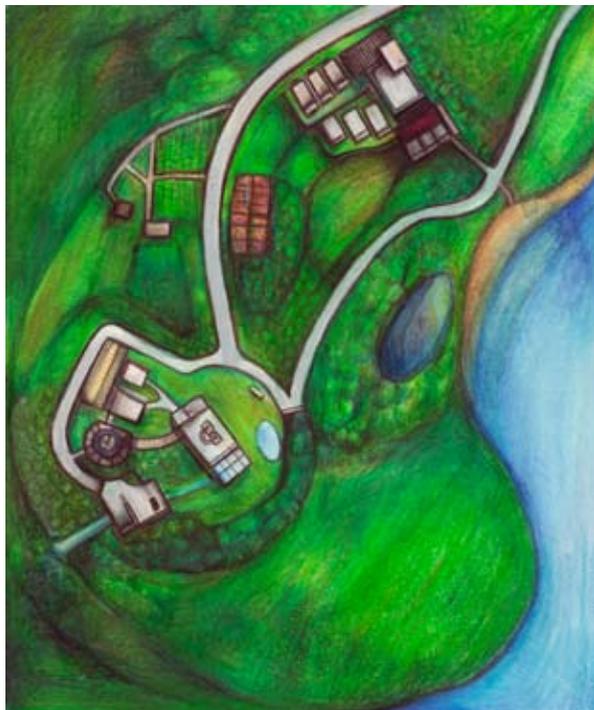
ハーブ園と有機野菜畑は、プロの農業スタッフ8名で維持管理されていて、そのスタッフもベビーユニバースの大事な正社員なのだ。

それらプロのファーマーを率いているのは、園尾正、42歳、彼のニックネームはその統率力から、親しみを混めて「親方」と呼ばれている。

今は社内用で精一杯のハーブ園と有機野菜畑だが、株式会社ベビーユニバース・ファームとしていずれ独立採算の事業化という重要なミッションが会社から親方：園尾には与えられている。そのミッションには、ファーム用の生産管理ソフトの開発も最重要任務として含まれているのだ。

シャレの好きな親方：園尾は思う、

「これが本当のファーム・ウェアだ...」





澄み切った風景

散り出した桜が小雨のように舞う鎌倉山。

その頂上付近にある老舗の料亭の一室からは、階下の斜面に広がる美しい日本庭園とその向こうに相模湾が淡く輝いている。

日本画のように澄み切った風景に箸を休めてみとれていた大柄の紳士が、ぼつりと言った。

「ミスター小山！、この風景はまさに日本の宝ですね。」

意外とこの風景になじんではいるが、髪は一点の曇りもない美しいブロンドだ。

「はい、お気に召して光栄です。ミスタークラウド！」

凛として応えたのは、ベビーユニバースの代表取締役社長でCOOの小山である。

卸したてのようなシャキッとしたスーツにはしわ1つなく隙がないが、温和な笑顔には気負いも全くない。

「近代化という幻影のもと、アメリカ文化に席卷された日本ですが、まだまだこのような美しい風景はところどころ残っています。ここは会長が昔から、大切なお客様だけをお連れするベビーユニバースにとって最も大切な場所の1つです」

そうなのだ、ミスタークラウドとは、言わずと知れたDTPでは世界ナンバーワンの製版ソフト会社のCEO、その人なのだ。

本社はベルギー王国第2の都市であるアンドワープにある。

2位以下の会社を圧倒的に離して、世界シェアは70%を超える。

実力でのしあがった生え抜きの社長だが、ベルギー王国の貴族出身である為、並の品格ではない。

その世界ナンバーワンの製版ソフト会社との包括的な業務提携契約書に先ほど二人のサインをして来たばかりなのだ。

締結後に、明日の朝一便で帰国する多忙のクラウドを気遣って、小山がこの宴に誘ったのだ。

「ミスタークラウド、既にサインは済みましたので、本音で質問しても宜しいでしょうか？」

品のある優しい目をして、クラウドは答えた。

「すでに重要パートナーとなった我々に遠慮はいりません、ミスター小山！」

「はい、ありがとうございます、それでは率直にうかがいます」

「日本には御社と釣り合う規模の会社は他にもたくさん存在します、勿論それはご存知のハズです、その中で弊社のような小さな会社をパートナーとして選択頂いた事はうれしくてなりません、それ自体が最大の疑問なのです」

じっと小山の話を聞いていたクラウドは、隠しきれない威厳をにじませながら静かに答えた。

「ミスター小山、分かりました！ その疑問を取り払いましょう。確かに、日本で一番大きな新日本フィルムさんとの提携を狙っていたのは事実です。というより、先月にお宅の会長が尋ねて来るまでは、すでに決定事項でした」

小山は驚いたように、

「え、会長が御社に寄った事は聞いておりましたが、挨拶に寄っただけだと聞いておりました」

「はい、確かに挨拶に来られただけでした、決して流暢とはいえない英語で。ただ、帰り際に手焼きのせんべいとこの写真を1枚おいていかれたのです」

といて、スーツの内ポケットから1枚の写真を抜き取って、小山に渡した。

なお疑問が続くという顔で小山は聞いた、

「これが？、これは弊社のサポート室の何の変哲もない、いつもの風景です」

深くうなずいてクラウドは応えた、

「そうです、この何気ないサポート室風景、そのオペレータの彼女達の笑顔と目を観て、私は決定を覆しました」

「その笑顔と目は、この風景のようにどこまでも澄み切って美しかった...」





重厚な気品

朝もやがひいていくと、世界で有数の美しい港町、横浜が浮かび上がってくる。一言で横浜と言っても日本の市町村の中では最大の人口360万人を有する巨大な市だ。特に関内地区は古い建物が保存されており、港町らしい雰囲気をかもし出している。その関内地区でもひときわ古い建物である「ホテルニューグランド」は山下公園の正面にそびえる。昭和2年のオープンという歴史だけでは語れない重厚な気品が漂っている。そのロビーが朝から慌ただしくうごめいている。20メートルほどの細長い深紅のステージとその回りの客席が次々とプロの職人達によって設営されていた。昼近くになってようやくその全貌がみえて来たあたりから、すらりとした美しい八頭身の女性達が次々とステージ裏の臨時の楽屋へと消えて行く。一流のホテルに軽やかなジャズの音楽が流れ出したころ、一流のモデルを一流の演出家が的確な指示を出して一流のファッションショーに仕上げていき、最終リハーサルを終えようとしていた。それらを微動だにせず見つめていた女性が、隣の女性にささやくように指示を出している。「あの子の靴とベルトがあってないわ、ベルトはもう少し細めで色は茶系に変えて！」「それから、あの子のジャケットの肩がぬけているわ、気をつけるように言って！」

温かな気品漂う顔からは想像もつかないほど、びしびしと指示が飛ぶ。彼女は日本を代表するファッションデザイナー「沢登みき」だ。「MIKI SAWANOBORI」ブランドの顧客は今や世界までひろがる。「了解！、でも彼女のベルトはベージュにします」と沢登に気迫でも負けていない、そう、彼女こそ、沢登をして、「富田でないと私は服を創れない」と言わしめた、沢登の右腕、モデリストの富田だ。若くは見えるが、既に五十を過ぎている沢登と十は離れていない。隠しきれない目尻の小じわまでに品が漂う。モデリストとはデザイナーの創造を実際に服に落とし込む全ての権限を有するいわば設計責任者なのだ。マスターパターン制作は勿論の事、場合によっては生地を選定までこなすプロ中のプロだ。沢登はずっと富田と二人三脚で「MIKI SAWANOBORI」ブランドをここまで育て上げて来た。「先生！、今日はベビーユニバースの会長がお見えになるようです」「え、じゃー気が抜けないわね、彼にはいつも辛口の評論をされるのよ、それに確か富田が使っているのはベビーユニバースのパターン・メーカー・システムでしょ？」

「はい、もう5年ほど愛用しています、今はあのシステムがないと服は創れません。それに、ベビーユニバースのWEBショッピングツールがなかったら、今のうちの売上は望めなかったと思います」「彼はいつも後ろの立ち見席で、こっそりお忍びで来るから、今日は必ずVIP席にお通しして！」彼と気軽に呼ぶのは、ベビーユニバースの会長と沢登はかつて某アパレル企業で同僚だったのだ。いわば同じ釜の飯を食った仲だ。「はい、了解です、先生！、それにベビーユニバースのWEB統括バイヤーの高嶋さんも来られますので、会長の隣の席をご用意致します」「そうね、ここ最近、彼がトップセールスを売上げるバイヤーでしょ？」「はい、売上もトップですが、消化率でもトップです。さすが会長の懐刀ですね」「結局、ベビーユニバースにうちの大事な部分を握られているじゃない、悔しいがああ狸親父とは腐れ縁ね」

そう聞いた富田は思う
「先生、どこかうれしそう...」





冷たい水と暖かい涙

赤道直下でありながら、過ごしやすい都市がケニア共和国の首都ナイロビだ。

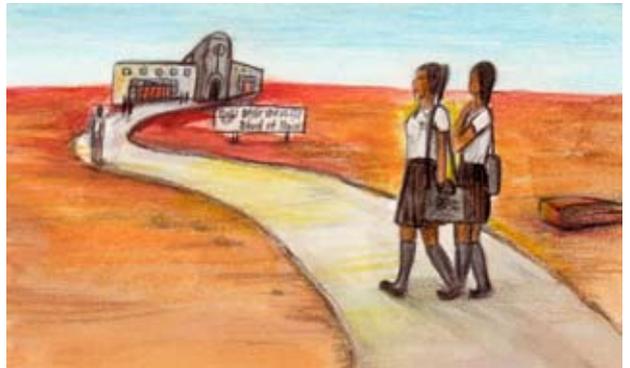
標高約1600mに位置し、マサイ語で

「冷たい水」を意味する比較的涼しい近代都市である。

そのナイロビの中心部から近いところに位置するのが、ナイロビ国立公園だ。

首都の中にありながら面積は117平方キロメートルもあり、地平線までありそうな勢いだ。

動物達も過ごしやすいようで、のんびりとしている。



その国立公園に隣接する一角に、ひっそりと小さな学校が建っている。

決して贅沢な造りではないが、独特の赤土の上に立つ清楚で品がある学校だ。

清楚に見えるのは平屋で機能的な建物だけではなく、生徒達の目が皆、凛としてキラキラと輝いているからだ。

さらに建物の電力は全て屋根にあるソーラーパネルでまかなわれているし、清潔な水はその電力を使って十分な量がくみ上げられている。

また生徒達には白いシャツに黒い短パンと女子は黒いプリーツスカートというシンプルで清潔な学生服が皆に与えられていて、どの子も誇らしげに制服を着ている。

白いシャツのポケットには、黒い刺繍で何かのマークが入っていた。

サバンナの動物達にPRしてもその効果は全く期待できないだろうが、その刺繍をよく見ると見覚えのある独特のロゴマークが入っている。

そうなのだ、ここはベビーユニバース社の利益のほんの一部と、社員の善意の心付けで建てられた小中高等学校、Baby Universe School of Nairobi。

日本などの先進国であれば、たかが中堅のソフト開発会社一社の利益で学校を運営する事はとうてい不可能であるが、ここなら普段の経費を節約すれば、このような学校の運営も可能なのだ。

また優秀な成績で卒業でき、かつ本人の希望があれば、ベビーユニバースに入社できるようになっている。

だから彼らの勉強ができるという喜びは半端ではない。

ナイロビ最大のスラム街であるキベラ地区での劣悪な環境の為に父親を早く亡くしたレミー・オバンジョは、七人の兄弟の長女として本来なら学校など行かずに母親を助けて働かなくてはならなかったが、まもなくこの学校を主席で卒業できる予定だ。

卒業後は、本人のたつての希望でベビーユニバースEUの総務部への就職が決まっていた。

入学当初から、手紙のやり取りをしていた里親であるベビーユニバースの会長宛に、レミーから、お礼の手紙が届いた。

その手紙は、いつもの達者な英語ではなく、たどたどしい覚えたての手書きの日本語だった。

「日本のお父さんへ、わたしは本当に幸せです、私の夢はベビーユニバースの経費をもっともっと節約して、キベラ地区にも2つ目の学校を創る事です。その時は私にもう一度力を貸して下さい、それまで私はいっしょうけんめい頑張り...」

涙腺が極端に緩んだ会長は、むせてその手紙を最後まで読む事ができなかった...



漁師が量子

年中を通して18度を一度たりとも狂わずに保ち続けているチリ1つ舞っていない完璧な部屋、そう、ここはベビーユニバースが誇る最新鋭のサーバー室だ。

中堅ソフト開発会社としては、贅沢過ぎるぐらゐの設備を誇っている。

それもそのはずで、ベビーユニバースは今やインターネット企業と言ってもいいほど、ネット関連での売上が柱となっていた。

その中で、何やら図面をじっと睨んでいる男が1人、この最新サーバー室を一手に引受けている、開発部サーバー管理課、課長の橋爪孝、開発本部の長（おさ）であるCTO山中腹心の部下だ。

一説によるとIQは180を超えるらしいが、日焼けしたたくましい体格の訳は、何と入社前は下田漁港の漁師だったという異色な逸材だ。その元漁師が見ていた図面がこのサーバー室の配置設計図面だ。

現在のベビーユニバースはもはや一端のネット企業となっていたが、今後はモバイル・ネット企業として更なる成長を行かなければならないという、ボード会議の重要決定が下ったのだ。

ボード会議で決まった以上、それがどんな決定でも社員一丸となって突き進まなければならない。

現在のこのサーバー設備では不十分として自ら設計のサーバー設備にNoを突きつけたのも橋爪だ。

通常、サーバー機は主と副の同じ構成の二台のマシンどちらかが稼働している。

それをロードバランサーという機器が二台を監視し、どちらか一方に問題があれば、生きている方のマシンに切り替えてサーバーの運営を止めないように設計されている。

またその1台のマシンのハードディスクはミラーリングされていて、同時に2つのハードディスクが死がない限り大事なデータを守るようになっている。

だから稼働するマシンだけのスペースでみれば、実際は半分以下のスペースだけで済むはずなのだ。

その為、今後のモバイル用サーバーが劇的に増えれば、残りわずかなサーバー室のスペースはあつと言う間に埋まってしまう。

さらに橋爪には難問が突きつけられた。

どんなに強固なサーバー室でもそれを上回るような地震にあえば、一瞬で瓦礫と化す。

実際に過去の都市型の地震では、それらが起っているのだ。

だからボード会議からは、そのような大震災が起ってもサーバーの運営を止めずにデータを守るサーバー設備を設計せよと絶対命令が発令されたのだ。



面積の拡張とセキュリティの向上、その相反する難問に、橋爪の回答はあまりにも大胆だった。

- ・熱海基地のサーバー室をセクターA
- ・Baby Universe EUの本社サーバールームをセクターB
- ・Baby Universe USの本社サーバールームをセクターC

この3つのサーバー構成を全く同じ三つ子のサーバールームとして、それら3カ所のサーバーセクターを大企業も驚く太いバックボーン専用回線で繋げ、サーバー機器の内容は勿論、データも全く同じデータとしてシンクロさせる。

このような大胆でかつ合理的な方法で難問を回避する事に成功した。

たしかに膨大な費用は掛かったが、稼働していないマシンの半分をそれぞれのサーバールームから減らす事に成功した事で、節約できた経費も半端ではなかった。

元々優秀なエンジニア達がセクションにいたので、設計および設定はそれほど時間は掛からなかったが、膨大なデータをシンクロさせるソフトウェアの開発には、優秀なプログラマー15名が選抜され、約半年掛かって完成した。

この地球規模のサーバー設備も、このベースで事業が拡大していけば、後三年でパンクすると計算式は弾いていた。

その計算式を見て、橋爪は思う。

「これだけ苦心した設備も後三年の運命か、次は量子コンピュータでクラスタ構成するしかないな...」



過去の幻想



むせるような赤い太陽が茶褐色のガンジス川を燃える様に染めていく。

お世辞にも綺麗な川ではないが、この夕日だけは絶品だ。

カルカッタでは洪水のように人、人、人だったので、どうしてもこの夕日を観てから日本に帰国したかった。

褐色の美しい肌が赤い夕日に染まり、まるで金箔を塗りたくったように輝いているのは、ベビーユニバースのキュートな超大型新人、Dr.セラティー主席研究員だ。

インド理工系の最高学府インド工

科大学グワーハーティー校のドクターコースを主席で卒業したまさに天才型頭脳の持ち主だ。

敬虔（けいけん）なヒンズー教徒であるが、豚肉以外は何でも食べる現代っ子だ。

Dr.セラティーは昨年ドクターコースを卒業し、すぐにベビーユニバースの熱海ラボの主席研究員となった。

すでに1つの研究室をあたえられ、牛島所長の管理下で量子コンピュータ用の3Dグラフィック・アプリケーションの研究をしているが、彼女の脳細胞を研究する方がよほど価値があるのでは、と思えるほどの逸材だ。

カルカッタの出張に来ていたのは、彼女の故郷が近かったからではなく、カルカッタ郊外で量子コンピュータの世界会議があり、それに招待されていたのだ。

如何に天才のDr.セラティーをして、

「世界はやはりすごいわ！ここにいたら私はただの人」

と思わせるほど、世界の頭脳が集まって来ていた。

ずっと白熱した高度な議論がされていたが、最終的には、量子コンピュータ用の時期OSをオープンソースで開発するという結論に達していた。

その次期OSに搭載する3Dグラフィック処理のロジックは、なんと、ベビーユニバース主席研究員、Dr.セラティー開発のエンジンを使う事で議論が終息しようとしていた。

彼女のロジックは群を抜いていたからだ。

あわてて、Macのテレビ会議アプリを立ち上げた彼女は、牛島所長にその許可を取ろうとしていた。

「牛島所長！、大変です、私の3Dグラフィックエンジンが次期OSに搭載される事になりそうです」

いつも冷静な牛島だったが、この時は少し声がうわずっているのがわかる。

「おー！、やはり決まったか、おめでとう、Dr.セラティー」

「ありがとうございます、でも牛島所長、オープンソースですが宜しいのですか？」

「何を小ちゃい事を言ってるんだ、すでに会長からは全権を任されているから全く問題ない」

「そうですか、それでは、ソース提供の認証を開始致します」

「了解！早速掛かってくれ、ただし手続きには手抜かりのないようにな」

と牛島はうれしそうに言った。

勿論、オープンソースとなれば直接にはビジネス上のメリットは少ないが、ベビーユニバースがリードしている技術が標準化となれば、間接的な恩恵は計り知れない。

「この時代に特許や著作権などという過去の幻想にしがみついている企業は全て死んでいくのだ」

と牛島はつくづく思うのだった...



温まる温泉

降りしきる秋の長雨で全ての垢が洗い流されていくような錯覚に落ち入ったところ、彼の歩が止まった。雨具を持ってこなかった事を後悔したが、後の祭りだ。全身に浴びた雨で全ての体温が奪われたような気がして、気力さえもなえて来た。

ただ、どうしてもこの峠を越えなければならない。
残されたわずかな気力だけで何とか足を前に出す。
つま先の感覚もとうに無くなっている。

「もう駄目か！無謀な挑戦はするモノではないな」
と思った時、見覚えのあるロゴマークがおぼろげに光る建物が見えてきた。

「熱海基地だ、助かった！」

ついに彼が帰ってきた、ベビーユニバースがかつて10名程度の小さな会社だったころ、突然やめた丸太だ。

詳細は不明だが、風の便りにオーストラリアで現地の女性と結婚して幸せに暮らしているとの話は聞いていた。その丸太から4日前に突然、会長宛にスカイプの呼び出しが掛かった。この頃になるとスカイプの映像も非常に綺麗でスムーズに動いている。

「社長、あっ、いえ、会長お久しぶりです」精悍な顔つきが一段と鋭さを増していた。

「おー！丸太か、元気だったか？、ところで6年も何をしていたのだ？」

会長の目が、まるで我が子と話しているように優しくなっている。

「はい、オーストラリアのパスで、IT企業のコンサルティングをやっておりました」

「やっていた？、という事はやめたのだな？」

「はい、お恥ずかしい限りですが、確かにやめました」

「確か、オーストラリア人の奥さんがいると聞いたが？」

「はい、家内とはなんとかやっています」

その時、会長の目が少し光ったような気がした。

「ちょっとそのまま待っていてくれ」

会長はスカイプを"一時退席中"にし、あわてて、東京本社の社長室に電話をした。

「はい会長！小山です。」

「小山社長、緊急に承認がほしいのです。優秀なマーケティングのスペシャリストをひとり雇いたいのですが、宜しいですか？会えばわかりますが、彼なら私が保証します」

常に沈着冷静な小山が、間髪入れずに答えた、

「はい、会長がそこまで仰るなら、私は異存ありません。マーケティング・マネージャーという要職で如何でしょうか。ちょうど、戦略的マーケティングの強化を考えておりました」

性格は全く違うふたりだが、絶妙な"あうんの呼吸"だ。

「ありがとうございます、来週からそちらにやりますので、よろしくお願い致します。かならず、小山社長にとってかけがえのない参謀となることと思います」

あわてたように電話をきった会長は、スカイプを"オンライン"に切り替えた。

「待たせてすまん！。なあー丸太、うちに戻ってこい」

「会長、あいかわらずですね、実は正直申し上げますと、私もお願いしようと思っておりました」

「それじゃ決定だ、採用は東京本社となるが、その前に1度熱海基地に来てくれ」

と、会長がせっかちにスカイプを切ったのが4日程前だった。

その会長に会うため新幹線に乗ってきた丸太が、何を思ったか、突然1つ手前の小田原駅でおりてしまい、それから獣道をひたすら、熱海基地に向かっていった。スムーズに行く事に対して何か気が咎めたのだろうか、突然の退社をいまだ悔いているのかもしれない。

「あそこまでいけば、温泉がある、もう一息だ」

先ほどまでほとんど止まっていた足が勝手に進んでいく。

温まりたかったのは決して体だけではあるまい...





凄いコピー

驚愕の旋律が最新鋭の音響設備が揃ったホールに鳴り響いていた。

ホールは思ったより狭く、50人ほどで一杯になる。

決してオリジナルのメロディではないが、天才ギタリスト：ジミーペイジの目にも止まらぬ独特のコード進行を忠実にコピーしている。

並大抵のギターテクニックではない。

あまりに速すぎて、指が、いや、手が全く見えない。

ボーカル、ベース、ドラムも一流のテクニックなのだが、このギタリストの前では影が薄い。

古いロックの名曲だが、ホールの観客は総立ちで揺れている。いつの時代でも、良いものは良い。



レスポールギターを腰より随分低い位置で揺らすように引いているのは、来年の春、デザイン専門学校を卒業予定のベビーユニバースのインターン生、福西 佳代だ。

長身でノーメイクだったので、男性と勘違いしていた観客も多い。

それにしても、ここまでギターが巧い女性もめずらしい。

ベビーユニバースではデザイン部門に限らず、本人の強い意思さえあれば、基本的にインターンを受け入れる。

あくまでも狭き門ではあるが、その内何人かはベビーユニバース入社への道が開けるのだ。

実は福西も来年ベビーユニバースへの就職を希望していた。

決定すれば、寺田チーフの下、15人目のクリエイターとして、ベビーユニバース・デザイン室への配属が許される。

なんと！この演奏会はベビーユニバース恒例のデザイン室入社テストなのだ。

3年前からデザイン室に限り、プレゼンテーション力での入社可否が決まる。

そのかわりプレゼンテーションの内容は本人が自由に決める事ができるのだ。

デザインに直接関係無くても良いが、表現力が求められるレベルは半端ではない。

東京本社や熱海基地から音楽好きの社員が大勢集まって来ている。

寺田チーフは勿論の事、人事部長の菅原雅美マネージャーや、社長、会長まで来ている。

またオブザーバー（発言権はあるが、決定権はない）として、浜崎ディレクターの顔も見えた。

世界の全ての音楽を聞いているのでは、と思うほど浜崎は音楽通だ。

「寺田チーフ、どうなの、彼女？」

「う～ん！音楽のレベルとしては申し分ないですね」

「レベルとしては、っていうと、他に何か」

「浜崎ディレクターこそ、どうなんですか？」

「プレゼンテーション能力としてはピカイチだね、ギターテクも凄い、でも？」

「でもって？」

皆、奥歯にモノがつままったように首をかしげている。

すばらしいプレゼンテーション能力なのだが、何かが足りないのだ。

と突然会長が、

「個性が無いな！」

はっとした顔で、寺田チーフが、

「そ、そうなんですよ会長！おいしいけど、ベビーユニバースのクリエイターには圧倒的なオリジナリティが必要です」

「凄いのですが、コピーは所詮コピーです、残念ですが...」



解禁

まるで未来都市のような機能的で、官能的とさえ感じる最新の空港、そうここは国際線が全面的にオープンした羽田空港だ。

国内、国際線のハブ空港としても世界的にひけをとらない。

国内線は未だ二本の滑走路だが、新たな埋め立てにより国際線専用として三本の滑走路がすでに稼働している。

遠くて評判の悪かった成田空港は、第2の国際空港として機能はしているが、物流拠点としての意味合いが強くなってきた。

国内線の出発ロビーには無かったスターバックスコーヒーも国際線には2つも用意されていた。

いつものカフェラテ、グランデ・サイズのカフェインを脳に送り込んでいるのでは、営業本部国際OEM担当マネージャーの柴橋だ。

OEMとは本来、相手先ブランド生産という意味だが、ベビーユニバースでは受託開発全般を以前よりそう呼んでいる。

勿論、クライアントの国によっては、ベビーユニバースEUやベビーユニバースUSと連携する事もあるが、今回はアジア地区だったので、ベビーユニバースの営業本部が単独で動いている。

柴橋の向かうのは、中国でも最大規模の工業都市、大連だ。

以前は安い賃金で世界の工場と呼ばれていた時期もあった中国だが、現在その機能はベトナムなどの他のアジア諸国に取ってかわられ、大連も工業主体から、サービス業などへのシフトが著しい。

その大連にあって世界規模のパッケージメーカーから、パッケージ自動化3Dシステムの引き合いを受け、柴橋が慎重に商談を取り纏めてきた。

慎重にとは、実はベビーユニバース社内重要規定で中国は取引相手国として厳重な規制が敷かれているのだ。

6年程前のベビーユニバースが小さかった時に、中国進出を徹底的に調査したのだが、ソフトウェアを使用する為のモラルが一定のレベルに達していなかった為、危険と判断されて、以後、中国への販売および提携は厳禁とされていた経緯があった。

その中国もここにきて漸く、モラルの向上が観られてきた為、今回の案件の動向を観て規制が解除されるかどうかの重要なテストケースとする事がボード会議で議決されたのだ。

つまり、単に案件の営業を成功させるだけではなく、中国市場解禁という重要任務が柴橋には課せられている。

そんな複雑な案件であるが、ベビーユニバースのOEM案件の中で最大規模の開発となる様子さえみせている。

ただでさえ、大変な営業力が求められる大型案件ではあるが、コピーや盗用などに慎重にも慎重を期さなければならない柴橋は、出発までの時間を利用して今回の進行方法を必至に考えていた。

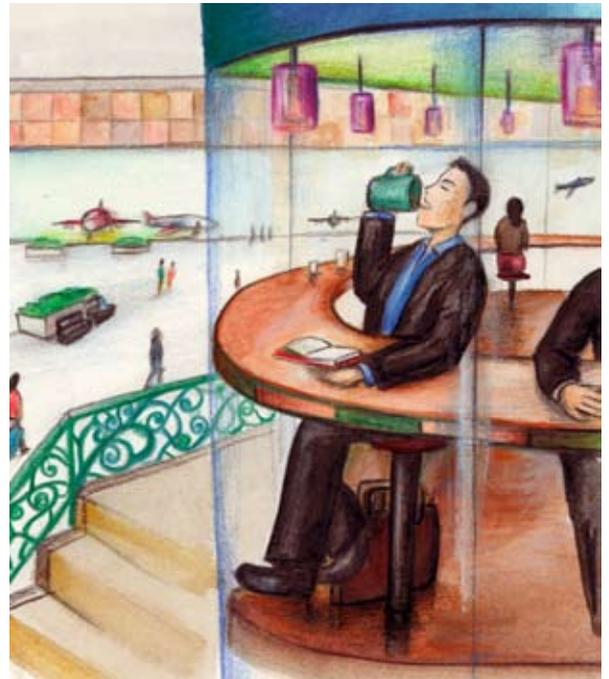
その後、無事に大連のホテルに入って、ぐっすりと寝た柴橋は、濃いめのエスプレッソを胃に流し込み、戦闘モードで、クライアントが待つ会議室に最後の調整に入っていた。

適当な挨拶でスタートした打合せが佳境に入り、深く深呼吸した柴橋は満を持して本題をしゃべり始めた。

「今回の案件は、ベビーユニバース得意の3D技術を使いますので、御社のお役に立てる自信はございますが、どうしても耳の痛い条件を提示しなければなりません」

柴橋は開き直ったように話始めた、恐らく正攻法を選択したのだろう。

「万が一にも、盗用や不正使用などが起こってはならないので、ソースコードのご提供は勿論できま





せんが、その上に複製防止の万全のセキュリティ機能を付加し、面倒な手順を踏んで頂かなくてはなりません、それでも宜しいでしょうか？」

一瞬、部屋の空気が張りつめたのを感じた柴橋は、脇の下に冷や汗をかいている事を自覚できた。

恐らく駄目だと思った時、クライアントのキーマンの工場長が何か吹っ切れたように話し出した。

「確かに面倒な手順を踏んで使用しなければならぬ事は、不効率となるかもしれませんが、通常であれば、我々を信用していないと映ります。ただ、それらの手順を踏む事を逆転の発想で、ミス防止の為の手順確認として使うようにすれば、面倒な時間を引いても余りあるのではないのでしょうか？」

つまり面倒と考えないで、厳格で正確な手順として置き換えて考えれば良いと思うのです」

いつのまにか場の緊張感が和らいでいる。

「正直に話して頂いてありがとうございます、柴橋さん、中国人は技術よりも、その人を信用して商売するのです。ベビーユニバース社というよりも、我々はあなたと取り組む事にしました...」



湯豆腐

身にしみる寒さが若い肌にも容赦なく刺さる。山合いに建つ近代的な工場棟がいくつもいくつも無限に広がっていくような錯覚に落ち入る。ここは京都の北のはずれにある広大な工場だ。

「安川工場長、ご契約内容とお話が違いますか？」

と工場の入り口付近の警備室前で、声を荒げているのは、ベビーユニバースの自動グラフィックシステム担当SEの熊谷だ。若干26才とSEとしてはまだまだ若い、入社3年目で今回のような大きな案件を一手に任されている。

困ったという表情で、我が子をあやすように対応しているのは、この巨大工場のトップ安川だ。流石に貫禄が違う。ここでは工場長と呼ばれているが、本社では常務取締役の肩書きを持つ。

「確かにお話していたお支払いの方法とは違うが、ただ、払わないと言っている訳ではなく、これだけ大きな金額を現金でお支払いするのが難しいとご説明しているのです」

「少なくとも私は150日の手形とはいかがではありませんでした、大切なお客様と言えども断じて受け入れられません。5ヶ月の長きに渡り、3人の優秀な開発部員に寝食を犠牲にしてあたらせておりました。安川工場長、大変恐縮ですが、今一度、今一度、ご再考をお願い致します」

さらにトーンを落とした野太い声で安川工場長が言い切る。

「熊谷さん、悪いがこのように高額な支払いは、現金ではなく手形と決まっているんだ、本当に良い仕事をして頂いたと感謝しているが、これは社内のルールだから無理だ。無借金企業である我が社の手形を信じてください」

そこまで言い切られた熊谷が落胆の表情を隠せないでいる。

「御社が超優良企業である事は疑う余地がありません、ですが、それでは私は本社に帰れません...」
と言いかけた時、警備室の影から、黒塗りのトヨタセンチュリーが滑るように入ってきた。

一旦、熊谷達の前を通り過ぎたが、すぐに止まった。

すかさずクロのブレザーを着た運転手が、そつなく後部座席左側のドアを両手であけた。

「安川、どうした？」

白髪の紳士が、黒光りする漆塗りの杖をついてゆっくりと車からおりて来た。温和な笑顔を浮かべているが、眼光は鋭い。

「会長、失礼しました！」

安川工場長が、風をきるように深々とお辞儀をした。

この紳士、ただ者ではない。

「こちらは？」

白髪の紳士が熊谷に鋭い眼光を向けたので、あわてて安川工場長が答えた。

「こちらはベビーユニバースのSE、熊谷リーダーです」

安川工場長は、熊谷に白髪の紳士がオーナー会長である事を手短かに説明した。

紹介された熊谷が緊張から声を裏返らせて、

「し、失礼致しました、ベビーユニバースの熊谷です、御社にはいつもお世話になっております」

安川工場長から事のいきさつを聞いた会長は、

「わかった、今回は現金でお支払いするようしなさい、本社には私から話しておく」

「熊谷さん、すまなかったね、失礼を許してくださいね。確かに当社のお支払いのルールは安川の言った通りなんです。このようなお支払い方は京都ではめずらしくないんですよ」

「ただ、ベビーユニバースさんとは5年前、うちのCADシステムを開発して頂いた時からのご縁なんです。あれからこの工場の生産効率は劇的に上がった。あの時、当時社長だったお宅の会長には、色々無理を聞いてもらい本当に世話になった。たまにはお宅の会長に湯豆腐を食べにくるようにゆってください、熊谷さん」

そう伝えると、きびすを返して工場玄関に秘書と消えていった。

同時に頭を上げた二人に、親子程の歳の差を越えた何かの繋がりが芽生えたような感覚が生まれた。

「熊谷さん、お互い冷えましたね、私たちもこれから湯豆腐でも食べにいきましょう...」





座禅



杉の巨木も折れ曲がりそうにな一面の銀世界。
国宝級のお堂が雪景色の中に点在している。
それぞれのお堂は長いわたり廊下で迷路のよう
に繋がっている。

「この世に無情ならざるものは無い、しかと心得よ」

金に輝く高貴な袈裟（けさ）をまとった高僧
が、気合いを入れて言い放った。

ここは、禅宗曹洞宗大本山「永平寺」の修行道
場である、僧堂（そうどう）の中だ。

零度近い板間で座禅を組んでいるのは、ベビー
ユニバースの会長のようだ。

靴下も履かず素足は辛いはずだが、高僧の一言

で迷いが吹っ切れたのか、会長の表情は穏やかである。

「ありがとうございます、御陰さまで1つ悟る事ができました。常にとどまらず、常に動いているの
ですね、この世の全てが」

無言の高僧がすり足で去った後、足のしびれも気にせず長い渡り廊下を会長は出口へと向かった。

高僧の一言で、何かを悟り、何が吹っ切れたのかは分からないが、明らかに来た時とは足どりが違っ
ている。

出口付近の有料駐車場に止めてあったアウディ・クアトロを蹴って一路、小松空港へと向かった。

車中、ブルトウスのヘッドセットマイクをつけ、短縮ダイヤル0番を押した。

「私だが、15:00には本社につけるから、緊急ボード会議を開くように小山社長に伝えてくれ、無理は
承知だが、一刻を争うんだ、頼む」

羽田には雪はなかった。

渋滞の時間帯の為、モノレールに飛び乗る。

本社24Fの会議室では、すでに社長の小川と、CFOの猪俣が会長の到着を待っていた。

後のメンバーはテレビ会議での参加となる。

その時、会長が息を切らせて会議室に飛び込んで来た。

椅子に着くやいなや、

「すまんが、前置きは抜きにしてください、悪いがすぐに本題に入らせてもらう。前回見送ったオセ
アニア地区への出店計画ですが、撤回し、用地買収にGOサインをください。

ブリスベンのあの絶好の用地を、断じて他社に渡してはなりません」

小川が尋ねる、

「会長、昨日の会議で決まった時、会長もご同意頂けたはずですが。それをどうして急に？、それに、
見送った理由としては、オセアニア支店を統括できる適任者がいないという理由も大きかったはずで
す」

すかさず会長が応える。

「確かに、社長の仰る通りです。でも私にはハッキリと見えます、世界経済の大きなうねりはアジア
をさらに南下してオセアニアへと向かっております、この流れは誰にも止めようがありません。

ここで、ベビーユニバースは次のステージに向かうべきです。その為には、どうしてもあの用地に拠
点を構えねばならないのです」

CFOとして創業から不動の地位を確立している専務取締役の肩書きを持つ猪俣が訊く、

「でも会長、統括する人材の件はどうするのですか？」

その質問を待っていたかのように、一拍おいて会長が応える。

「もちろん、この会議の招集をかけた時点で、その事も私の中では解決している、というより決めた
のだ。第四番目の拠点としてベビーユニバースAUを統括するのは...」

ボード会議メンバー全員がその答えを訊いて、凍ったように固まった...



茶室の出来事



少女がすすり泣くように猛層竹が哀しげにゆれている。
本来なら心地良いハズの風が今日はやけに重く感じる。
ベビーユニバース熱海基地の社食から連なる踏石を渡る足取りも重い。
うつむき加減にゆっくりと向かっている先にやけに小さな建物が
見えてきた。
入り口はさらに小さく、女性としては長身の菅原が、かがんでやっと入った。
菅原雅美はベビーユニバース人事部長として全社員を管理し、社長の小山に次いで的人事権を有している。

琉球畳が8枚ほど敷かれた数寄屋造りの部屋には、恐らく三十路手前と思われる優しそうな青年が背筋を伸ばして正座していた。

軽く会釈をしたしぐさに品があると菅原は思った。

「お待たせして失礼致しました。水島雄太さんですね？」

静寂に包まれた茶室で、青年が凜と応えた。

「はい！水島です。」

水島雄太はベビーユニバースの狭き門である正規入社テストを見事パスし、最終面接も一週間前に済ませていた。

一ヶ月後の合格通知までにはまだ猶予があるこの時期に突然ベビーユニバースの熱海基地に呼び出されたのだ。

ひと呼吸おいて、菅原が話し始めた。

「随分お待たせしてしまったのは、先ほどまで、弊社の最高会議である通称ボード会議が開かれておりました。実は水島さんの入社のは是非が議題だったのです」

「えっ！私の入社の為にボード会議が開かれたのですか」

知らない素振りを見せていた水島だが、何か少し落ち着かない様子もみえる。

「恐らく思い当たる節があるのではありませんか？水島雄太さん、あなたはベビーユニバースの最高経営責任者である会長の実の息子さんですね！」

ここまでハッキリと言われた水島は、観念したように話した。

「はい、確かに御社会長の息子に間違いありません」

「名字が違っていたので、全く気づきませんでした。私どもの身元調査で判明いたしました。すでに会長には確認済みです」

「それでは水島さん、弊社の社員規則に、役員の血縁者は入社できない！というルールがある事はご存知でしたか？」

それでも淡々と水島は応えた。

「はい、承知しておりました。ただ、私は会長と前妻との間にできた息子で、血は繋がっておりますが、戸籍上は赤の他人です。ですから問題ないと判断し、御社の入社テストを受けた次第です」

「はい、確かに戸籍上は赤の他人ですが、会長の息子さんには違いありません。それが、会議でもめた理由です。そしてボード会議では、例外は認められないとの最終の決断を下しました」

面接での手応えに自信を持っていただけに、水島にはこの回答は応えた。

うっすらと目が潤んでいるようにもみえる。

「私は、会長の息子としてテストしたのではありませんし、その恩恵を受けようとも思っておりません。たんにベビーユニバースの一員になりたかっただけです」

いつの間にか、小川社長が茶室に上がり込んできて、告げた。

「水島さん、私どもはあなたと仕事をしたかったが、ルールは曲げられない、許してください」

「ただし、血縁者の会長がやめれば話は別です」

肩を落としていた、水島は、ハッとして応えた。

「えっ！オヤジが…」



母の愛

残暑がまだ残る熱海基地にも、一面に咲いた蕎麦の白い花が涼しさをもたらしていた。

ベビーユニバース・ファームでは蕎麦も有機栽培で育てている。

順調にいけば、恐らく10月には収穫し旨い新蕎麦が社食のメニューに出てくる事だろう。

ベビーユニバース・ファームの地粉で作る新蕎麦は格別だが、

「今年はもう食べられないわ」

と猪俣は思った。

ベビーユニバースCFO（チーフ・フィナンシャル・オフィサー）である猪俣は、同時に専務取締役の肩書きも持つ。

いわばベビーユニバースの財務大臣といったところか。

ことお金に関する部分では絶対的な決裁権を持ち、社長や会長も一日置く。

実は猪俣のもう1つの顔は、会長の妻という肩書きも持っている。

つまり公私混同を避ける為、旧姓でずっと仕事をして来たのだ。

創業以来、会長と二人三脚でベビーユニバースをここまで育て上げた。

会長がベビーユニバースの父であれば、彼女はベビーユニバースの母という存在だろう。

この広大で残暑が残る中を、麦わら帽かぶった彼女は1人黙々とベビーユニバースの敷地の草むしりをしていた。

草達にも語りかけるように優しく丁寧な作業をしている。

土いじりが好きな猪俣だが、こうやって土や花に触っていると気持ちが落ち着くのだ。

夕刻になると、今度はデザイン棟に入り、我が子のような寺田チーフに、

「こら！寺田、机がきたない、こんな状態じゃ、いいデザインなんてできないわよ！」

14名のクリエイターを統率している寺田チーフも猪俣の前では形無しだ。

部下達には恥ずかしいが、猪俣に言われるとなぜか素直になれる。

「は、はい！、すぐに片付けます。でもどうしたんですか？こんな時間に」

「いいの、寺田がまた汚くしていないか心配で来たの！」

という横顔がどこか寂しそうであった。

もう夕刻に近いが、今度は、開発棟に入ってしまった。

役員専用のセキュリティ・カードがあれば、基本的にはどこでも入れる。

「山中チーフ、引き出しはちゃんと閉めておく、それから、モノを下におかないの！ったく！」

チーフ・テクノロジー・オフィサー（CTO）の山中も猪俣にかかれれば、たじたじだ。

「あ、はい！CFO、どうしたんです？珍しいですね」

「そう、山中がまた汚くしてるかと思って心配で来てみたの。これからは、ちゃんと綺麗にしておくのよ、こんな綺麗な部屋で開発できる事をちょっとは感謝なさい！」

「はい！」

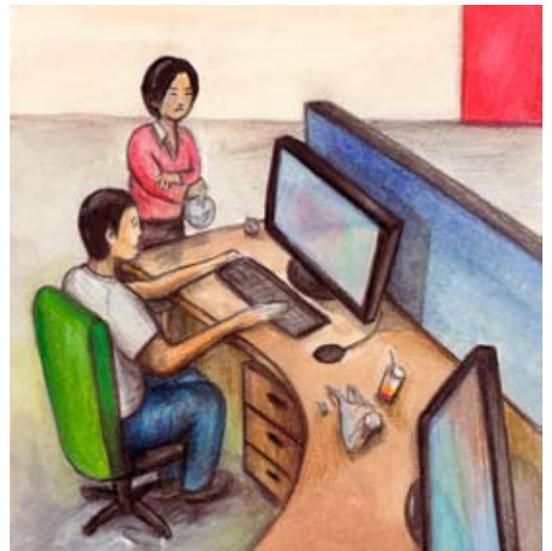
と山中は返事をしたが、CFOがどこか元気がないような気がした。

「次は、販売の高嶋マネージャーところに行く、あそこも汚そう！」

とだけ言って、すぐに出て行ってしまった。

山中は思う、

「CFO、何かあったかな？、まさか？、まさかな～…」





血の入れ替え

比較的に温暖な気候の熱海であるが、すでに紅葉で真っ赤に染まっている。

このあたりに散った源氏軍の血を吸っているようだ。

ただ熱海基地はいつもと何ら変わらない風景であった。

その時、販売部門を率いる高嶋のパソコンから、けたたましく呼び出し音になった。3Dスカイプの緊急放送だ。

高嶋は嫌な予感と共に、部下達の手を止めさせた。

しばらくすると、画面にはいつもの会長の温和な顔が映っている。

この頃のスカイプは、画質も奥行きまで感じるほどリアルになっている。

そう言えば最近、熱海基地で会長を見かけなくなっていた事に気づいた。

もっばら、本社やベビーユニバースEUとUSなどに行っていたようだ。

とその時、会長が何かをしゃべり始めた

「みんな元気ですか、会長です。急ですが、みんなにお知らせがあります。すぐ済みますので、しばらくお付き合いください」

「私がベビーユニバースを創業してから、はや約20年という歳月が過ぎました。ここまでベビーユニバースが歩んでこれたのも一重に皆さんのお陰です。本当にありがとう」

「ベビーユニバースはこれからも止まってはなりません、常に前進するのです...その為には、古い血は、奇麗な新しい血に入れ替えねばなりません...だから私は本日を持って退社する事を決意致しました」

時間が止まったように、会社中の空間が固まった。

「本当に長い間、私のわがままにつき合って頂きありがとうございます。みんなにあえて私は本当に幸せでした」

次に画面にはCFOが花束を抱えて、目頭をハンカチで押さえている姿が映る。

「CFOの猪俣です、私も本日づけで退社致します。もう私が怒る事もないので、みんな自分達で頑張るのですよ。小山新CEOの元、これからも頑張ってください...みんな～、ありがとう！」

次に小山新CEOが画面に映った。

やはり目が赤い。

「先ほどボード会議で信認されCEOとなった小山です。私は引き止めたのですが、会長、CFOはがんとして固辞されました...これ以上は無理と判断し、それなら円満に笑顔で送り出そうという気持ちになっております...」

ぐしゃぐしゃの顔はとても笑顔には見えない。

「会長夫妻は、ベビーユニバースを退社し、しばらくはオーストラリアのブリスベンにできるベビーユニバースAUの立ち上げをお手伝い頂ける事となりました、ただお住まいは隣国ニュージーランドのオークランド近郊との事です。

急なのですが、会長夫妻は明日の最終便で羽田から発たれます。

最後にもう一度会長、ご挨拶をお願い致します。」

「...」

画面では会長夫妻が花束を間にはさみ、抱き合って泣き続けていた。

...完！





あとがき

如何でしたでしょうか？

少しでも皆様の暇つぶしのお役にたてましたら幸いです。

ところで、面白いご報告です。

この小説を書こうと思ったのは、私が最も尊敬する小川税理士事務所の所長から、

「神田昌典さんをしらないとマーケティングを勉強した事にはならない」

と言われ、しばらくして神田さんの本を購入し読み始めました。

結論から言うと非常に参考になったのですが、その本の中で、神田さんは、最初に目標到達地点をイメージする事から始めなければならないと書いてあったのです。

強くイメージした事は実現するそうです。

なぜならば、

- ・人間の脳はイメージした方向に体をコントロールする
- ・イメージする事で普段使われていない脳が活性化する

そうすると、脳は錯覚をおこし、その目標に向かって凄い処理をしだすそうです。

これが成功の秘訣だと説いてありました。

本の中ではまずそれらイメージを文字で紙に書くようにと書いてありましたが、

私は元来字を書く事が苦手なので、ブログ中でイメージを小説形式にすれば良いと思いつき、早速始めたのです。

小さい頃から国語が苦手な私ですから、こうやって文を書く事も凄く苦勞したのですが、書き始めると面白くなり40日で24話の短編小説を書き上げました。

勿論、仕事が終わった深夜の作業でしたので、モウロウと書いた事もあり、途中おかしな文などございましたらご容赦ください。

そうやって書き始めていると面白い現象がありました、私の脳も勘違いをおこし出したのです。

どういう事かと申しますと、5年後の未来を書いているのにそれが現実の世界と混同を始めました。

しかもイメージして書いた部分は鮮明な映像になって記憶されていく事がわかりました。

ただ単に頭で考えていた時とは明らかに私の脳は違っている事に気づいたのです。

その事を弊社の元社員で、イラストレーターである丸山利広さんに頼み挿絵を描いて頂きました。

彼の暖かい手書きの挿絵によって、私のイメージもさらに明確になったのです。

これだけイメージが明確になると不思議なモノで、何か本当に達成できるという気持ちになってきました。

だってあるはずもない自社の社屋が見えるのですから、私の脳はかなりの錯覚をおこしています。

旨く説明できないのですが、ゴールが見えたという感じってわかりますか。

私に残された期間はあと5年しかありませんが、実現したいと本気で考えている五十嵐でした。

未来は誰にもわからないのですが、少なくとも5年後の未来を信じて頑張っていこうとしている人間がここにいる事だけは、真実です。

スタッフのみんな、俺に力を貸してください。

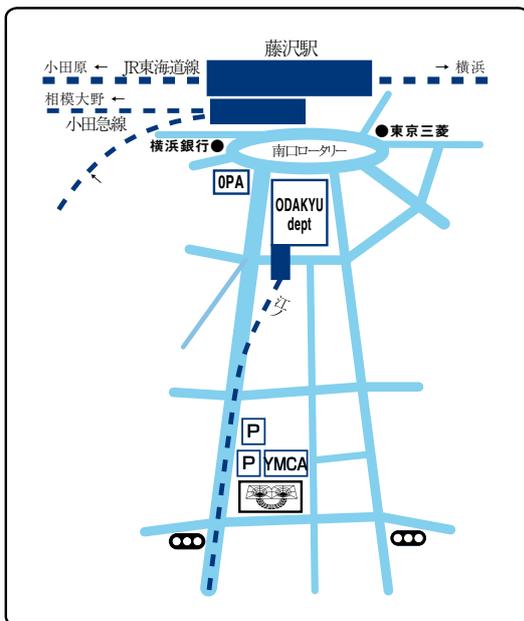
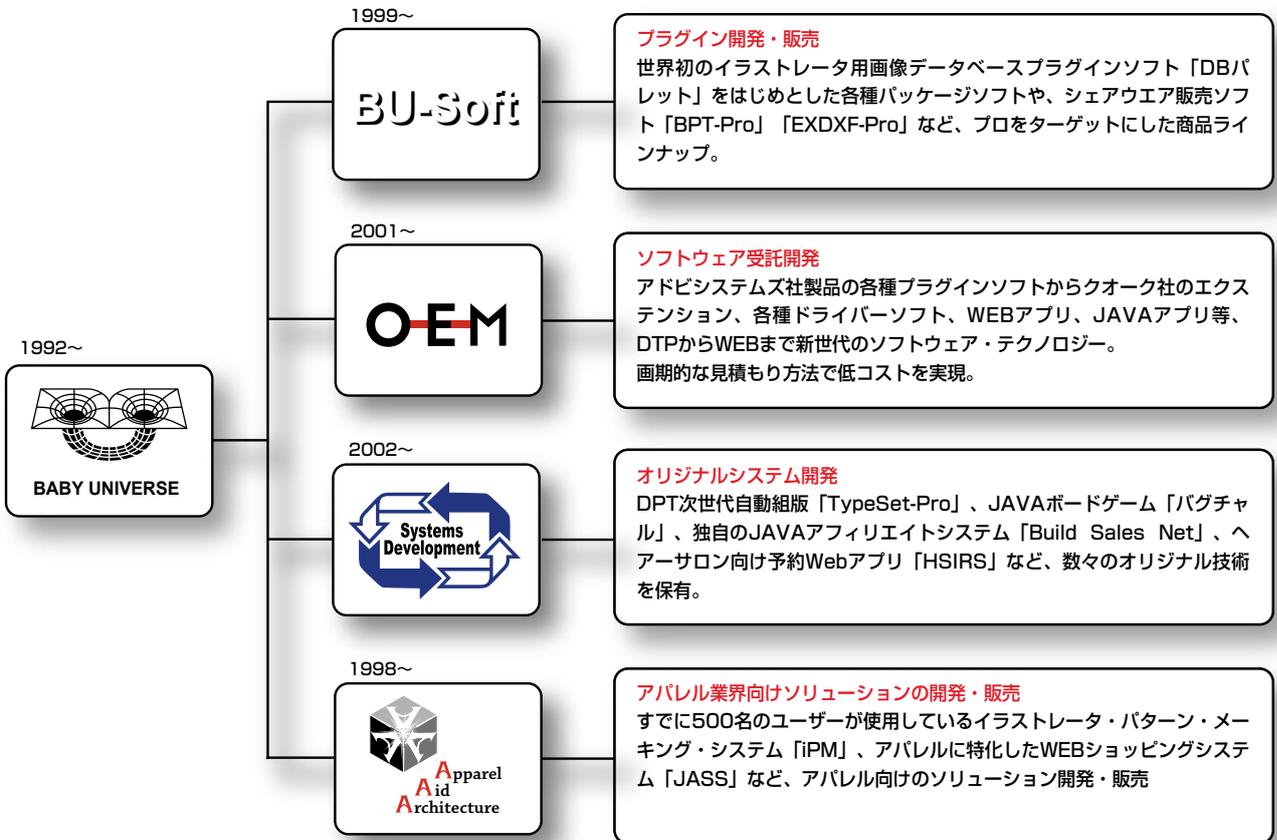
みんなで幸せになろう！

最後に、お読み頂いた感想や文句など何でも結構ですから、下記宛にご意見を頂ければ幸いです。

info@baby-universe.co.jp

「5年後のベビーユニバースを読んで」係まで。

ありがとうございました。



経営革新計画承認企業：2006年4月14日
「アパレル業界向けWEBショッピングシステムの開発」についての取り組みが、神奈川県から「経営革新計画」として承認。

会社名称 株式会社ベビーユニバース
 設立年月日 1992年9月4日
 代表者 五十嵐 隆典
 資本金 1000万円
 所在地 〒251-0025
 神奈川県藤沢市鶴沼石上1丁目13番13~304号
 0466-55-3000 Fax: ~3001
 E-mail info@baby-universe.co.jp
 URL http://www.baby-universe.co.jp

取引銀行 三菱東京UFJ銀行/恵比寿支店
 三井住友銀行/藤沢支店
 スルガ銀行/藤沢支店
 横浜信用金庫/根岸橋支店

業務内容 ソフトウェア&システム開発

取引企業 (順不同)
 共同通信社
 凸版印刷株式会社
 マルチビッツ株式会社
 株式会社丸紅インフォテック
 ソフトバンクBB株式会社
 シチズン時計株式会社
 グラフテック株式会社
 株式会社富士写真フィルム...etc